

# 湯ヶ原より

国木田独歩

青空文庫



うちやまくんそくか  
内山君足下

何故なげそう急きふに飛び出だしたかとの君きみの質問しつもんは御ご尤もつともである。僕ぼくは不幸ふかうにして之これを君きみに白はく状じやうしてしまはなければならぬことに立たち到いたつた。然しか或あるはこれが僕ぼくの幸さいであるかも知しれない、たゞ僕ぼくの今いまの心こころは確たしかに不幸ふかうと感をじて居をるのである、これさいを幸さいであつたと知しることは今後こんごのことであらう。しかし將この來さきこれを幸さいであつたと知しる時ときと雖いへども、たしかに不幸ふかうであるかと感かんずるに違ちがいがない。僕ぼくは知しらないで宜よい、唯ただ感かんじたくないものだ。

『こゝに一人ひとりの少女せうぢよあり。』小説せうせつは何時いつでもこんな風ふうに初はじまるもので、批評家ひくやうかは戀こひの小説せうせつにも飽あきくしたとの御注文ごちゆうもん、然しかし年とし若わかいお互たがの身みに取とつては、事ことの實じつ際さいが矢張やはりこんな風ふうに初はじまるのだから致いたし方かたがない。僕ぼくは批評家ひくやうかの御注文ごちゆうもんに應おうずべく紳かみさ様が僕ぼおよび人じん類るゐをつつて呉くれなかつたことを感かん謝しゃする。

去さる十三日にちの夜よ、僕ぼくは獨ひとりり机つくに倚より掛かつてぼんやり考かんがへて居あた。十時じを過すぎ家いへの者ものは寢ねてしまひ、外そとは雨あめがしとく降ふつて居ある。親おやも兄きやうだい。弟あにもない僕ぼくの身みには、こんな晩ばんは頗すこぶる感かん心しんしないので、おまけに下宿げしゆくすまひ、宿住しゆくぢゆう、所謂いはゆるる半夜燈はんやとう前まへ十年事じゆんねんじ、一時いつ和雨わう到たう心頭しんとうといふ一件けんだから堪忍たまつたものでない、まづ僕ぼくは泣なきだしさうな顔かほをして凝然じつと洋燈らんぷの傘かさを見みつめ

て居たと想像し給へ。

此時フと思ひ出したのはお絹のことである、お絹、お絹、君は未だ此名にはお知己でないだらう。君ばかりでない、僕の朋友の中、何人も未だ此名が如何に僕の心に深い、優しい、穩かな響を傳へるかの消息を知らないのである。『こゝに一人の少女あり、其名を絹といふ』と僕は小説批評家への面當に今一度特筆大書する。

僕は此少女を思ひ出すと共に『戀しい』、『見たい』、『逢ひたい』の情がむら／＼とこみ上げて來た。君が何と言はうとも實際さうであつたから仕方がない。此天地間、僕を愛し、又僕が愛する者は唯だ此少女ばかりといふ風な感情が爲て來た。あゝ是れ『浮きたる心』だらうか、何故に自然を愛する心は清く高くして、少女（人間）を戀ふる心は『浮きたる心』、『いやらしい心』、『不健全なる心』だらうか、僕は一念こゝに及ばば世の倫理學者、健全先生、批評家、なんといふ動物を地球外に放逐したくなる、西印度の猛烈なる火山よ、何故に爾の熱火を此種の動物の頭上には注がざりしぞ！

僕はお絹が梨をむいて、僕が獨で入いつてる浴室に、そつと持て來て呉れたことを思ひ、二人で溪流に沿ふて散歩したことを思ひ、其優しい言葉を思ひ、其無邪氣な態度を

思ひ、其笑顔を思ひ、思はず机を打つて、『明日の朝に行く!』と叫げんだ。

お絹とは何人ぞ、君驚く勿れ、藝者でも女郎でもない、海老茶式部でも島田の令嬢でもない、美人でもない、醜婦でもない、たゞの女である、湯原の温泉宿中

西屋の女中である! 今僕の斯う筆を執つて居る家の女中である! 田舎の百姓の娘である! 小田原は大都會と心得て居る田舎娘! この娘を僕が知つた

のは昨年の夏、君も御存知の如く病後、赤十字社の醫者に勧められて二ヶ月間此湯原に滞在して居た時である。

十四日の朝僕は支度も勿々に宿を飛び出した。銀座で半襟、簪、其他娘が喜びさうな品を買ひ整へて汽車に乗つた。僕は今日まで女を喜ばすべく半襟を買はなかつたが、若し彼の娘に此等の品を與たら如何に喜ぶだらうと思ふと、僕もうれしくつて堪らなかつた。見榮坊! 世には見榮で女に物を與つたり、與らなかつたりする者が澤山ある。僕は心から此貧しい贈物を我愛する田舎娘に呈上する!

夜來の雨はあがつたが、空氣は濕つて、空には雲が漂ふて居た。夏の初の旅、僕は何よりも是が好で、今日まで數々此季節に旅行した、然しあゝ何等の幸福ぞ、胸に樂しい、嬉れしい空想を懷きながら、今夜は彼の娘に遇はれると思ひながら、今夜は彼の清

く澄んだ温泉に入られると思ひながら、此好時節に旅行せんとは。

國府津で下りた時は日光雲間を洩れて、新緑の山も、野も、林も、眼さむるばかり輝いて來た。愉快！電車が景氣よく走り出す、函嶺諸峰は奥ゆかしく、嚴かに、面を壓して近いて來る！軽い、淡々しい雲が沖なる海の上を漂ふて居る、鷗が飛ぶ、浪が碎ける、そら雲が日を隠くした！薄い影が野の上を、海の上を這う、忽ち又明るくなる、此時僕は決して自分を不幸な男とは思はなかつた。又決して厭世家たるの權利は無かつた。

小田原へ着いて何時も感ずるのは、自分もどうせ地上に住むならば此處に住みたいといふことである。古い城、高い山、天に連らなる大洋、且つ樹木が繁つて居る。洋畫に依つて身を立てやうといふ僕の空想としては此處に永住の家を持ちたいといふのも無理ではなからう。

小田原から先は例の人車鐵道。僕は一時も早く湯原へ着きたいので好きな小田原に半日を送るほどの樂も捨て、電車から下りて晝飯を終るや直ぐ人車に乗つた。人車へ乗ると最早半分湯ヶ原に着いた氣になつた。此人車鐵道の目的が熱海、伊豆山、湯ヶ原の如き温泉地にあるので、これに乗れば最早大丈夫といふ氣になるの

は温泉行の一人々々皆な同感であらう。

人車は徐々々として小田原の町を離れた。僕は窓から首を出して見て居る。忽ちラツパを勇ましく吹き立て、車は傾斜を飛ぶやうに滑る。空は名残なく晴れた。海風は横さまに窓を吹きつける。顧みると町の旅館の旗が竿頭に白く動いて居る。

僕は頭を轉じて行手を見た。すると軌道に浴ふて三人、田舎者が小田原の城下へ出るといふ旅装、赤く見えるのは娘の、白く見えるのは老母の、からげた腰も頑丈らしいのは老父さんで、人車の過ぎゆくのを避ける積りで立つて此方を向いて居る。『やお絹！』と思ふ間もなく車は飛ぶ、三人は忽ち窓の下に來た。

『お絹さん！』と僕は思はず手を舉げた。お絹はにつこり笑つて、さつと顔を赤めて、禮をした。人と車との間は見ると遠ざかつた。

若し同車の人が無かつたら僕は地段駄を踏んだらう、帽子を投げつけたらう。僕と向き合つて、眞面目な顔して居る役人らしい先生が居るではないか、僕は唯だがつかりして手を拱ぬいてしまつた。

言はでも知るお絹は最早中西屋に居ないのである、父母の家に歸り、嫁入の仕度に取りかゝつたのである。昨年の夏も他の女中から小田原のお婿さんなど廻られて居

たのを自分じぶんは知しつて居ゐる、あゝ愈々いよくさうだ！と思おもふと僕ぼくは慚いになつてしまつた。一ひと口に言いへば、海うみも山やまもない、沖おきの大島おほしま、彼あれが何なんだらう。大浪おほなみ小浪こなみの景色けしき、何なんだ。今いまの今いままで僕ぼくをよろこばして居ゐた自然しぜんは、忽たちまちの中に何なんの面白おもしろ味みもなくなくなつてしまつた。僕ぼくとは他人たにんになつてしまつた。

湯原ゆがはらの温泉をんせんは僕ぼくになじみの深い處ふかところであるから、たとひお絹きぬが居ゐないでも僕ぼくに取とつて興味きょうみのない譯わけはない、然しかし既すでにお絹きぬを知しつた後の僕ぼくには、お絹きぬの居ゐないことは寧むしろ不愉快ふゆくわいの場所ばしょとなつてしまつたのである。不愉快ふゆくわいの人車じんしゃに揺ゆられて此この淋さびしい溪間たにまに送り届とぎけられることは、頗すこぶる苦痛くつうであつたが、今いま更さら引返ひきかへす事ことも出来できず、其日そのひの午後ごご五時頃じごころ、此宿このやどに着ついた。突然とつぜんのことであるから宿やどの主人あるじを驚おどろかした。主人あるじは忠實ちゆうじつな人ひとであるから、非常ひじやうに歡迎くわんげいして呉くれた。湯ゆに入はいつて居ゐると女ぢよちゆう中の一人ひとりが來きて、『小山こやまさんお氣きの毒どくですね。』

『何故なぜ？』

『お絹きぬさんは最早もう居ゐませんよ、』と言いひ捨すてゝばたくと逃にげて去いつた。哀あはれなる哉かな、これこが僕ぼくの失戀しつれんの弔詞てうじである！失戀しつれん？、失戀しつれんが聞きいてあきれる。僕ぼくは戀こひして居ゐたのだらうけれども、夢ゆめに、實じつに夢ゆめにもお絹きぬをどうしやうといふ事ことはなかつた、お絹きぬも亦またた、

僕ぼくを憎にくくからず思おもつて居ゐたらう、決けつして其それ以上いじやうのことは思おもはなかつたに違ちがひない。

處ところが其その夜よ、女ぢよちゆう中ぢよちゆうどもが僕ぼくの部へ屋やに集あつつて、宿やとむすめの娘むすめも來きた。お絹きぬの話はなしがででて、お絹きぬは愈い々やくをだはらよめ小田原せうでんげんに嫁よめにゆくことに定きまつた一條いちじゆうを聞きかされた時ときの僕ぼくの心こころ持もち、僕ぼくの運命うんめいが定さだまつたやうで、今いま更さら何なんとも言いへぬ不ふ快くわいでならなかつた。しからば矢張やはり失しつ戀れんであらう！ 僕ぼくはお絹きぬを自じ分ぶんの物もの、自じ分ぶんのみを愛あいすべき人ひとと、何いつ時まの間まにか思おもひ込こんで居ゐたのであらう。

土産物みやげものは女ぢよちゆう中ぢよちゆうや娘むすめに分ぶん配ぱいしてしまつた。彼等かれらは確たしかによるこんだ、然しかし僕ぼくは嬉うれしくも何なんともない。

翌日よくじつは雨あめ、朝あさからしよぼくと降ふつて陰鬱いんうつ極つきまる天氣てんき。溪流けいりうの水みづ増ましてザアくと騒さう々／＼しいこと非ひ常じやう。晝飯ひるめしに宿やとむすめの娘むすめが給仕きふじに來きて、僕ぼくの顔かほを見みて笑わらふから、僕ぼくも笑わらはざるを得えない。

『貴所あなたはお絹きぬに逢あひたくつて？』

『可笑をかしい事ことを言いひますね、昨さくねん年ねんあんなに世話せわになつた人ひとに會あひたいのは當あたりまへうと思おもふ。』

『逢あはして上あげましようか？』

『難有いね、何分宜しく。』

『明日きつとお絹さん宅へ來ますよ。』

『來たら宜しく被仰て下さい、』と僕が眞實にしないので娘は黙つて唯だ笑つて居た。お絹は此娘と従姉妹なのである。

午後は降り止んだが晴れさうにもせず雲は地を這ふようにして飛ぶ、狭い溪は益々狭くなつて、僕は牢獄にでも坐つて居る氣。坐敷に坐つたまゝ爲る事もなく茫然と外を眺めて居たが、ちらと僕の眼を遮つて直ぐ又隣家の軒先で隠れてしまつた者がある。それがお絹らしい。僕は直ぐ外に出た。

石ばかりごろ／＼した往來の淋しき。僅に十軒ばかりの温泉宿。其外の百姓家とても數える計り、物を商ふ家も準じて幾軒もない寂寞たる溪間！この溪間が雨も雲に閉ざされて見る物悉く光を失ふた時の光景を想像し給へ。僕は溪流に沿ふて此淋しい往來を當もなく歩いた。流を下つて行くも二三丁、上れば一丁、其中にペンキで塗つた橋がある、其間を、如何な心地で僕はぶらついたらう。温泉宿の欄干に倚つて外を眺めて居る人は皆な泣き出しさうな顔付をして居る、軒先で小供を負て居る娘は病人のやうで背の小供はめそ／＼と泣いて居る。陰鬱！屈托！

寂寥！そして僕の眼には何處かに悲惨の影さへも見えるのである。

お絹には出逢はなかつた。當り前である。僕は其翌日降り出しさうな空をも恐れず十國峠へと單身宿を出た。宿の者は總が、りで止めたが聞かない、伴を連れて行けど勧めても謝絶。山は雲の中、僕は雲に登る積りで遮二無二登つた。

僕は今日まで斯んな凄寥たる光景に出遇つたことはない。足の下から灰色の雲が忽ち現はれ、忽ち消える。草原をわたる風は物すごく鳴つて耳を掠める、雲の絶間絶間から見える者は山又山。天地間僕一人、鳥も鳴かず。僕は暫らく絶頂の石に倚つて居た。この時、戀もなければ失戀もない、たゞ悽愴の感に堪えず、我生の孤獨を泣かざるを得なかつた。

歸路に眞闇に繁つた森の中を通る時、僕は斯んな事を思ひながら歩いた、若し僕が足を踏み滑べらして此溪に落ちる、死んでしまふ、中西屋では僕が歸らぬので大騒ぎを初める、樵夫を僦ふて僕を索す、此暗い溪底に僕の死體が横つて居る、東京へ電報を打つ、君か淡路君か飛んで來る、そして僕は焼かれてしまふ。天地間最早小山某といふ晝かきの書生は居なくなる！と僕は思つた時、思はず足を止めた。頭の上の眞黒に繁つた枝から水がぼた／＼落ちる、墓穴のやうな溪底では水の激して

流れる音が懐く響く。僕は身の髪の毛のよだつを感じた。

死人のやうな顔をして僕の歸つて來たのを見て、宿の者は如何なに驚いたらう。其  
驚よりも僕の驚いたのは此日お絹が來たが、午後又實家へ歸つたとの事である。

そのよ 其夜から僕は熱が出て今日で三日になるが未だ快然しない。山に登つて風邪を引いたのであらう。

君よ、君は今の時文評論家でないから、此三日の間、床の中に呻吟して居た時考へたことを聞いて呉れるだらう。

戀は力である、人の抵抗することの出来ない力である。此力を認識せず、又此力を壓へ得ると思ふ人は、未だ此力に觸れなかつた人である。其證據には會て戀の爲めに苦み悶えた人も、時經つて、普通の人となる時は、何故に彼時自分が戀の爲めに斯くまで苦悶したかを、自分で疑がう者である。則ち彼は戀の力に觸れて居ないからである。同じ人ですら其通り、況んや會て戀の力に觸れたことのない人が如何して他人の戀の消息が解らう、その樂が解らう、其苦が解らう？。

戀に迷ふを笑ふ人は、怪しげな傳説、學説に迷はぬがよい。戀は人の至情である。此至情をあざける人は、百萬年も千萬年も千萬年も生きるが可い、御氣の毒ながら地球の皮

は忽ち諸君を吸ひ込むべく待つて居る、泡のかたまり先生諸君、僕は諸君が此不可思議なる大宇宙をも統御して居るやうな顔構をして居るのを見ると冷笑したくなる僕は諸君が今少しく眞面目に、謙遜に、嚴肅に、此人生と此天地の問題を見て貰ひたいのである。

諸君が戀を笑ふのは、畢竟、人を笑ふのである、人は諸君が思つてよりも神秘なる動物である。若し人の心に宿る所の戀をすら笑ふべく信すべからざる者ならば、人生遂に何の價ぞ、人の心ほど嘘偽な者は無いではないか。諸君にして若し、月夜笛を聞いて、諸君の心に少しにても『永遠』の佛が映るならば、戀を信ぜよ。若し、諸君にして中江兆民先生と同一種であつて、十八里零圍氣を振舞はして満足して居るならば、諸君は何の權威あつて、『春短し何に不滅の命ぞと』云々と歌ふ人の自由に干渉し得るぞ。『若い時は二度はない』と稱してあらゆる肉慾を恣まゝにせんとする青年男女の自由に干渉し得るぞ。

内山君足下、先づ此位にして置かう。さて斯の如くに僕は戀其物に隨喜した。これは失戀の賜かも知れない。明後日は僕は歸京する。

小田原を通る時、僕は如何な感があるだらう。

小山生

# 青空文庫情報

底本：「定本 国木田独歩全集 第二卷」学習研究社

1964（昭和39）年7月1日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1995（平成7）年7月3日増補版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：鈴木厚司

校正：mayu

2001年11月7日公開

2004年7月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 湯ヶ原より

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>